

# 『それから』論

深江浩

四二

『それから』には二重の意味での「幻滅イデオロギカル打破」が描かれている。ひとつは、代助の知的な目に映じた日本の現状に対する幻滅である。もうひとつは、この幻滅を前提にして意識的に構築された代助自身の生活がやはりひとつの「幻像」であったという自覚である。この二重のディスイリュージョンを描く中で、漱石は「現代日本の開化」の中にはらまれる社会的、精神的な問題性を具象化したといえる。

日露戦争後、この戦争が勝利に終わったにもかかわらず、幻滅的な気分がとくに知識階級の一部に生まれてきた。それは独歩の『号外』に予見的に描かれている。

「三十七年から八年の中ごろまでは、通りがかりの赤の他人にさえ言葉をかけてみたいようであったのが、今ではまたもとの赤の他人どうしの往来になっちゃった」

このような状況の出現は独歩がここでとらえていたように、共通

の国家的目標の喪失の結果ということもできる。同時に、これは戦争を通じて発展してきた資本主義の法則性からして今後ますます拡大し一般化していくはずの人間相互のかかわり方を示してもいる。世界から見捨てられた自我という気分が知識階級の青年たちの中に漂い始め、彼等は逆に世界を見捨てることによって、自我の優位を確かめようとする。彼等の知的な自負心はやがて無為につながり、無為が精神的頹落をよびおこしてゆく。ヨーロッパの世紀末思想が彼等の間に好んで受け入れられ、それがいわば彼等の精神的「支柱」ともなるのである。「自分は戦争でなく、ほかに何か、戦争の時のような気持ちにみんながなって暮らす方法はないものかしらんと考えた。考えながら歩いた」という、『号外』の結尾の部分はおそらく独歩が考えていた以上に大切な問題を含んでいたものであり、それは近代に生きる人間が全力をあげてとりくまねばならない問題となるはずのものである。やがて啄木が「我々は今最も厳密に、大

胆に、自由に『今日』を研究して、其処に我々自身にとつての『明日』の必要を発見しなければならぬ<sup>①</sup>と力強く主張するはずである。

このような状況の中で、『それから』は「今日」のもつ問題性を当時のどの作品よりもトータルに描き出した作品だといえないだろうか。

註① 『時代閉塞の現状』（明治43）（改造社版全集第四卷五五 四頁）

一

この小説の主人公、長井代助は大学をかなり良い成績で卒業したが、もう三十になるのに何の職業にもつかない。親の金とも兄の金ともつかぬものを毎月本家から貰って生活している。家にはばあやと書生をひとりずつおいて身の廻りの世話をさせている。彼は豊かな時間の大部分を読書とか音楽会とか観劇とか、もっぱら精神的快楽を満足させるために費している。しかし真のエピキュリアンがそうであるように、物質的ぜいたくはむしろきりつめて、精神の平衡を乱さないようにしている。彼はまだ結婚もしていない。父はしきりにすすめるが、いつも彼はいいかげんな口実をこしらえては回避してきている。そして、ある種の女との接触によって生理的な平衡

『それから』論

を保ってきている。「渝らざる愛を、今の世に口にするものを偽善家の第一位に置いた」代助にとって、それはなんら不道徳を意味するものではなかった。

もつとも、三年前の代助はこうではなかった。自分をおさえてでも、世のため、人のためにつくすことに誇りをおく人でさえあった。それが何故このような高等遊民としての生活に甘んずるようになったのであろうか。それは何も「不意に大きな狂瀾に捲き込まれて、驚ろきの余り、心機一転の結果を来たした」といふ様な、小説じみた歴史を有つてゐる為ではない。全く彼れ自身に特有な思索と観察の力によつて、次第々に鍍金を自分で剥がして来た」結果、こうなったのである。彼のいう「鍍金」というのはいわば「道義本位」の考え方であるが、当時の日本の状況を仔細に観察するとき、そのような考え方を信ずるのは余程の愚物か、それとも信じたふりをする偽善者にはかならなかつた。

では、代助が観察した当時の日本の状況とはどのようなものであつたろうか。

まず代助がとりあげるのは職業の問題と人間の孤立化という問題である。すでによく知られているように、代助によれば今日の職業はパンのための手段であつて、職業それ自身が目的になっていない。「あらゆる神聖な労力は、みんな麵麩を離れている」。したが

って、パンのための手段に墮した職業について自分の品性を汚したくないというのが代助の考えである。とくに西洋の圧力を強くうけている日本は蛙が牛と競争をするような無理を強いられている。その結果、生活慾が道義慾を容赦なく圧倒する。「泰西の文明の圧迫を受けて、其重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為に泣き得るものに、代助は未だ曾て出会はなかつた」のである。人と人とはまるで皮と皮とで接しているように彼には思えた。それだけではない。「互の腹の中で侮辱する事なしには、互に接触を敢てし得ぬ」のが今日の人間関係である。したがって、代助にとっては、「現代の社会は孤立した人間の集合体」にすぎなかつた。このような社会の中に立ちまじって、人に腹の中で侮辱を加えたり、また加えられたりしながら生きていくことは彼にはたえられなかつた。こうして、彼は現実から一步退いて、「有の儘の世界を、有の儘で受け取つて、其中僕に尤も適したものに接触を保つて満足する」ようになったのである。このように自分の態度をきめてかかれば、「孤独の底に陥つて煩悶する」必要はなかつた。それを「現代人の踏むべき必然の運命」であると諦視できたのである。

漱石はここで代助の高等遊民的生活がどのような社会的条件の中で生まれたものであるかを、代助のとらえた限りでの社会に対する批判という形で示した。資本主義が発展するということは、ひとつ

の側面からみれば、人口のより多くの部分をプロレタリア化する、つまり労働力を商品として売る以外に生きる手段を失わしめるということであるから、日露戦争後の資本主義の発展の中で、職業の問題が疎外された労働という視点からとりあげられたのには強い必然性があつた<sup>①</sup>。ところで人口のより多くの部分がプロレタリア化するということは、実はトータルな社会関係にますます多くの人間がのつびきならず組み入れられてゆくことである。ところが個々人の意識の上ではますます自分を孤立したものと感ずるようになる。ここに資本主義社会における個人の意識のもち方と現実の社会関係との逆説的な関係がある。したがって、代助の現実批判は自分その圏外においた批判であるとはいへ、これ以後資本主義の発展の中でますます顕在化するはずの問題を、早くも、自分の生き方との関係でとりあげたものといえよう。旧友平岡が代助の生活態度にあきたらず、「僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、其現実社会が、僕の意志の為に、幾分でも、僕の思ひ通りになつたと云ふ確証を握らなくつちや、生きてゐられないね。そこに僕と云ふものゝ存在の価値を認めるんだ」といっても、彼の大阪での失敗の経験自体がかって代助の意見の正しさを立証するという皮肉な関係になる。ところにも、代助の現代の職業に対する洞察が本質をついたものである事がわかる。「僕の意志」によって現実を措定しようとする考え方

はたしかに近代の産物なのであるが、近代の現実には「僕の意志」などひとつの虚偽の意識に転化せしめるという痛烈な皮肉に平岡は気づかない。したがって、主観的には彼は自分の意志で社会に働らきかけているつもりでいながら、支店長に対する献策をあきらめて、

「周囲の空気と融和」するようになってきたように、実は資本の法則の下に従わせられていることに気づかない。「僕の意志」が価値基準となっているだけに、ここに精神的頹廃が始まる。金銭上の不正事件はおそらく「僕の意志」でもって現実社会に働らきかけようとした挙句の果てに起ったものである。「其場合々々で当然の事を遣るんでせうけれども、其当然が矢つ張り失敗になるんでせう」と代助は平岡の失敗を父に説明している。このように代助の現代批判はきわめて鋭く本質的な問題をついていたから、この批判を前提として築きあげられた彼の生活態度を改めさせることは容易ではないといえよう。

ところで、彼の生活の経済的な支え手である父は代助がいつまでもかかる生活が続けているのにあきたらないものを感じている。代助の父、長井得は幕末維新の動乱期を生命を賭して切りぬけてきた。彼には、旧藩時代に、藩の財政が疲弊した時、また明治に入って旧藩主の家政が困窮した時、身をもってそのたてなおしに当って成功した経験がある。旧藩主は長井の献身的な活動に感謝をこめ

て、「誠者天之道也」という直筆の額を贈った。父はこれが甚だ得意である。明治以後、彼は官界にあったが、やがてそれをやめて実業界に入り、相当の財産家になった。これはすべて自分の熱誠の結果であると、父はかたく信じている。したがって、代助の生活態度に対して、誠実と熱心が足らないと叱言をいうことになる。

「さう人間は自分を文考へてるべきではない。世の中もある。国家もある。少しは人の為に何かしなくては心持のわるいものだ……」「それは実業が厭なら厭で好い。何も金を儲ける丈が日本の為になるとも限るまいから。金は取らんでも構はない。

……金は今迄通り己が補助して遣る。……だから奮発して何か為るが好い。国民の義務としてするが好い。……」「御前は、どう云ふものか、誠実と熱心が缺けてゐる様だ。それぢや不可ん。だから何にも出来ないんだ。」

これが父の言い分である。平岡は自分の意志の働らきを現実社会の中で確証するために働らくのだといった。これに対して、父は「世の中」、「国家」、「人の為」、「国民の義務」を口にする。要するに、個人を超越した価値のために働らくことを主張する。そこに「誠実と熱心」が生まれる。これに対して代助はこう考える。「道義本位」の教育をうけた父がこういうのは無理もないとは思うが、「劇烈な生活慾に冒されやすい実業」に従事していて、「道義本位」

の考え方を貫けるはずがない。そこに矛盾の苦痛があるはずである。ところが父は「昔の自分が普通通りの心得で、今の事業を是迄に成し遂げたとはかり公言する」。父は余程の愚物か偽君子にちがいないと。「然し御父さんの国家社会の為に尽すには驚ろいた。何でも十八の年から今日迄のべつに尽してるんだつてね」。「国家社会の為に尽して、金が御父さん位儲かるなら、僕も尽しても好い」と嫂に向つて皮肉をとばす所以である。その鋭い知的洞察によつて、「幻像打破イデオロギイの方面に向つて」思索を重ねてきた代助は、今日では、「凡での道徳の出立点は社会的事実より外にないと信じてゐた。始めから頭の中に硬張つた道徳を据え付けて、其道徳から逆に社会的事実を發展させ様とする程本末を誤つた話はないと信じてゐた」。当時の「社会的事実」に立って見た時、平岡のいう「僕の意志」も、父の「道義本位」の考え方も、ともに一種の「幻像イデオロギイ」として代助の目には映つたのである。だから、「誠者天之道也」の下に、「人の道にあらざ」と加えたくなるのである。父と平岡、その考え方も社会的位置もいわば両極にあるものではあるが、この二人はまぎれもなく当時の基底的な現実社会の中で活動している人間のタイプである。その二人を以上のように批判し去つた代助が現実社会にかかわらうとしないのは当然といえは当然であつた。

彼は平岡にいった。

「無論食ふに困る様になれば、何時でも降参するさ。然し今日に不自由のないものが、何を苦しんで劣等な経験を嘗めるものか。印度人が外套を着て、冬の来た時の用心をすると同じ事だもの」

確かに、ここには資本主義社会に対するひとつの態度のとり方が典型的に示されている。とくに、学問や芸術にたずさわる知識階級の人間なら、誰しも代助のように考えるだろう。芥川が指摘したように、当時の知識人青年の中には代助に「惚れこんだどころか、みづから代助を気取つた人も少くなかつた」<sup>⑤</sup>のである。事実、白樺派の青年たちの生活態度は多分に代助のそれに似通つていたといえよう。<sup>③</sup>資本主義の發展の中で、中産階級が次第に切り詰められてきているとはいへ（それは平岡に代表される）、一方で、まだまだ堅固な経済的基盤を有する者も多数存在するという時期においては、代助の現実批判とその生活態度はリアリティをもちえたのである。<sup>④</sup>

しかし、ひるがえつて考えてみるに、パンに關係した劣等な経験から身を守つて、「麵麴を離れ水を離れた贅沢な経験」の世界で「年長者」にならうとする生活態度から、本当に人間的に充実した生活が生まれてくるのであろうか。「進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが」と漱石は鋭く洞察しているではないか。この作品の独創のひとつは、確かに、

この進化の裏面としての退化を丹念に形象化したところにあるといえる。「漱石に肉の放蕩からくる頽廃美を求めても無駄であるが、知の放蕩からくる頽廃美は彼において極まつてゐると思ふ。少くともこの日本では。知性の冒険と頽廃とそこからの自己救済と、この戦ひの過程に私は漱石の一側面をみようと思ふものである」という指摘は、長井代助のためにいわれた言葉のように私には思われる。

この作品の冒頭は、周知のように、代助の目覚めの様子から始まつている。枕元を見ると八重の櫓が一輪臺の上に落ちてゐる。代助は眠りの中でこの花の落ちる音を確かにきいたというのである。しかも、ゴムまりを天井裏から投げつけた程の響きにおいて、それきいたというのである。ここから例の心臓の鼓動をためすために手を胸に当てる描写へと続く。心臓の鼓動をききながら、「是が命である」と彼は考えるのだが、やがて、この時を刻むかのような鼓動が「自分を死に誘ふ警鐘」のように思えてくる。そこで彼はぞつとすする。そして、「彼は血潮によつて打たるゝ掛念のない、静かな心臓を想像するに堪へぬ程に、生きたがる男である」と作者によつて説明される。この冒頭の部分において、早くも、代助の生への欲求が病的にせんさいな神経と表裏の關係にあることが示される。もっとも、代助自身、「もう病氣ですよ」というところをみれば、それを自認しているのもあろう。むしろ、「病氣」であることに一種

の誇りさえ感じてゐる。「自分の神経は……天爵的に貴族となつた報に受ける不文の刑罰である」というのだから。しかし、この「病氣」が彼の自認しているより以上に深い所で、彼を腐蝕しつづけていることについてはまだ彼は気がつかないでゐる。

さて次に、代助の洗面の様子が丹念に描写される。それはまるで「女が御白粉を付ける時の手付と一般」であり、また「實際彼は必要があれば、御白粉さへ付けかねぬ程に、肉体に誇を置く人である」と説明される。ここに、彼の生への欲求が一種のナルシズムと結びつくことが示される。外部世界との動的な關係の中で生の実を味わうことができるような、そんな社会ではないと見切りをつけた彼が生を確証する道は自己を對象化したものに自らかかわるといふ、いわば閉された円環の上を堂々めぐりするような道であつた。代助が本家に来て、自分が注文して描かせた欄間の絵を眺める場面がある。ところが、眺めているうちに、「其色が壁の上に塗り付けてあるのではなくつて、自分の眼球の中から飛び出して、壁の上へ行つて、べた／＼喰つ付く様に見えて来た。仕舞には眼球から色を出す具合一つで、向ふにある人物樹木が、此方の思ひ通りに変化出来る様になつた。代助はかくして、下手な箇所々々を悉く塗り更へて、とう／＼自分の想像し得る限りの尤も美しくしい色彩に包圍されて、恍惚と坐つてゐた」といふ。ここに、代助の生の確証のし

かたが象徴的に示されている。<sup>⑤</sup>

洗面がすんで、約三十分後に代助は食卓につく。熱い紅茶にバターをつきのトースト。ここで、書生の門野が新聞に報せられている学校騒動のことを話題にする。門野はその校長排斥を痛快がる。しかし代助はそこに損得問題がからんでいると見る。「今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動をやるもんかね。ありや方便だよ、君」と代助はいう。彼は「凡ての道徳の出立点は社会的事実より外にない」と信ずるのだが、その「社会的事実」なるものを固定的にとらえる結果、あらゆる社会的行為を個人的利害に還元してとらえてしまう。それはたしかに現代社会の法則に根ざしてはいるが、その全体性においてではなく、一面を固定的にとらえたものにほかならない。日糖疑獄事件に対しても、野暮ったい驚きや好奇心を感じないかわりに、幸徳秋水の行動を監視する為に巡査が昼夜交代で張番していることをきかされても、「現代的滑稽の標本」以上には彼の目に映らない。こうして、代助の現代社会の洞察はきわめて鋭利にみえるけれども、物象化した「社会的事実」の考察にとどまり、この物象化現象を切り破るような性質のものではないことが示される。

物象化した「社会的事実」をそのまま社会の現実の姿と考え、その汚辱にまみれることをいさぎよしとせず、自分だけにかかわるよ

うなしかたで生きる証しを得ようとするとき、その行為はどういう行為になるだろうか。それはいわば「無目的な行為を目的」とする活動となる。彼の考えによればこうなる。

「人間はある目的を以て、生れたものではなかった。之と反対に、生れた人間に、始めてある目的が出来て来るのであった。最初から客観的にある目的を拵らへて、それを人間に附着するのは、其人間の自由な活動を、既に生れる時に奪つたと同じ事になる。だから人間の目的は、生れた本人が、本人自身に作つたものでなければならぬ。けれども、如何な本人でも、之を随意に作る事は出来ない。自己存在の目的は、自己存在の経過が、既にこれを天下に向つて発表したと同様だからである。／此根本義から出した代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としてゐた。……だから、代助は今日迄、自分の脳裏に願望嗜欲が起るたび毎に、是等の願望嗜欲を遂行するのを自己の目的として存在してゐた。……」

世界を措定し得ると自負した自我がその虚妄の夢から醒めて、物象化した世界の前に茫然と佇まざるをえなくなつた時、自我は自身にかかわるような形でしか存在できなくなる。その時、自我はここで代助が考えたようにしか考えることができなくなるはずである。したがって、ここで代助が考えたことは、実は近代社会が発展

する中で、ますます痛切となってくる自我中心に生きる知識人の精神上の根本的な問題を多分に予見的に示していたことになる。漱石の偉大さは、こうした自我のあり方にひそむ病弊を、自分の痛みとして、はっきり見つけていたところにあるといえよう。代助がこれほど明瞭に自己の存在のしかたと、目的と、行為との関係を自覚していたにもかかわらず、しばしばアンニニイにおそわれるというのはその病弊のあらわれである。こういうとき、「目的があつて歩くものは賤民だ」と信じていたはずの彼が、「自分は今何の為に、こんな事をしてゐるか」と問わずにはいられなくなるのである。しかし、もちろん、彼はこれをつきつめて考えようとはしなかった。

「二度頭を抑えて振り動かして」、「またかと云ふ具合に、すぐ切り棄てゝ仕舞」うのであった。けれども、彼の明瞭な意識の世界の下で、ひそかに、徐々に進行しつつある腐蝕作用がいつまでも彼をそのままにしておくはずがない。

「乾酪チーゼの中で、いくら虫が動いても、乾酪が元の位置にある間は、気が付かないと同じ事で、代助も此微震には殆んど自覚を有してゐなかつた」

しかし、その彼も、やがて一種の「不安」に襲われるようになる。「現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がない」と、かねがね信じて、世紀末思想にとらわれて、不安を口にする知

識人を冷笑していたにもかかわらず。したがって、この不安を自覚し出すと、最初は、彼はこれを「生活上の變化」からくるものと考えようとした。しかし、次第にそのようには割り切れなくなってくるのである。こうして、彼の明瞭な論理の世界の上に組み立てられた生活態度の根底を何ものが浸潤しつつある有様が示される。この代助の生活と意識に内在する矛盾を矛盾として、漱石ははっきり描き出そうとする。それには、この矛盾を顕在化させる何かある条件を設定する必要がある。漱石はここで二つの女性問題をもつてくる。これが代助の生活と意識に内在する矛盾を急速に激化させ、彼の運命を大きく転回させることになるのである。

註①すでに荒正人氏も漱石がここで職業の問題をとりあげた独創性を高く評価している。「職業を主題にした作品はあまり類例がない。本来ならば職業という主題は、市民社会を舞台とする以上、最も大切なものである。そこに眼をつけた漱石の視野は、現代作家よりもなおひろかつたといえよう」と。(『評伝夏目漱石』実業之日本社刊。二八五頁)

②芥川竜之介「点心」

③このことについては、鶴見俊輔氏「大正期の文化」(岩波講座「日本歴史19」所収)の第二章「市民主義思想の形成——『白樺』を中心として——」を参照せよ。



④もっと後の時代になれば代助に対する感じ方はずつと變つてくる。たとえば、亀井勝一郎は次のようにいつている。「あの時代に通用したあの鷹揚さと高踏的気分は、どれだけの悲痛を背後に担つてゐようと、今日の我々の眼からみると新しき俗人の新しき風格と云つた感を抱かせる。悲劇はわかるのだ。いまの私がその悲劇を打ち破つて幾分でも進歩してゐるとは格別思はない。が、満ち足りないのである」(「漱石における知性の悲劇」・昭和十年十一月「思想」・有精堂刊、日本文学研究資料叢書『夏目漱石』所収)

⑤亀井勝一郎前掲論文

⑥代助のナルシズムに注意を向けるように指摘したのは飛鳥井雅道氏である。(「漱石における男性と女性」・「文学」'67・11月号)また、代助のナルシズムとこの絵を眺める場面との関係については、すでに、越智治雄氏の指摘がある。(角川書店刊『漱石私論』一七二頁)

二

ここで、再び冒頭の章にもどらう。この章の最後の部分で、二通の郵便が来る。一通は旧友平岡常次郎の上京を知らせる端書。他の一通は代助の父からの封書で、色々話しがあるから来いという内容

のもの。この何でもない二通の郵便がやがて相反する二つの側面から代助の生活を容赦なくゆるがす二人の女性の問題につながり、自分の願望と嗜欲に従つて無目的として生きようとする彼に、否応なしに意志的決断を強いることになってくる。『それから』一篇の筋はこの二つの女性問題を中心に展開される。

父の話というのは代助の縁談であった。相手の女性というのは、父とその兄が旧幕時代に恩を受けた人の血をひく娘なのである。佐川と称するその家は関西の大地主であり、多額納税者である。父の真意は競争が激しく危険の多い実業に従事している者として、一見地味ではあるが強固な基盤を有する、かかる大地主を親戚にもつてを必要と考へての、いわば政略結婚なのである。もちろん、父は最初からそのような意図を代助に打ち明けたのではない。最初は代助の様子をうかがうにとどめている。縁談のことはむしろ嫂から洩らされる。二度目に始めて具体的に父から話される。父は代助に独立出来るだけの財産と洋行とをひきかえに、佐川の娘との結婚を承諾させようとする。代助の生活態度をみてとつた父は、今度は国民の義務として何かせよというふうな説教をするかわりに、代助の望む生活を続けさせるということを餌にこの結婚をおしつけようとしたのであろう。しかし代助にとっては不審である。「そんなに佐川の娘を貰ふ必要があるんですか」と問わないわけにいかない。する

と、父は激しい語調で、子供の将来が心配だとか、親の義務だとかいうことを述べたてる。代助は依然として許諾の意を表さない。父は誰か貰いたいのがあるのかときく。代助はないと答える。「ぢや、少しは此方の事も考へて呉れたら好からう。何もさう自分の事ばかり思つてゐないでも」と父はせわしい調子でいう。最初は代助の為をはかるようにいい、次に親の義務というふうな理由に移り、最後に、突然父自身の都合に急変する。代助は驚かざるをえない。「貴方にそれ程御都合が好い事があるなら、もう一遍考へてみませう」と答える。理窟でやりこめられたように感じた父は、「何も己の都合許で、嫁を貰へと云つてやしない」と訂正する。そして、世間態とか、親や兄弟の迷惑、本人自身の名譽にかかわる不始末の原因になるとかといった理由をあげた。が、結局、この時はうやむやに終わつた。

この場面をたんに論理の上からみれば、代助の觀察どおり、「親爺の考へは、万事中途半端に、或物を独り勝手に断定してから出立するんだから、毫も根本的の意義を有してゐない。しかのみならず、今利他本位でやつてるかと思ふと、何時の間にか利己本位に變つてゐる。言葉又は滾々として、勿体らしく出るが、要するに端倪すべからざる空談である」ということになる。しかし、現実の次元においては、代助の生活が何によって成り立っており、今後こそ

## 『それから』論

れを維持してゆくには何を必要とするかが実にアイロニカルに示されている。こういうわけで、代助に迫ってきた女性問題のうちの父につながる方は、代助が従来どおりの考え方でもって生活を続けていくための物質的条件に深くかわかることになるのである。一方、代助の方としても、積極的に結婚する気がないだけであつて、佐川の娘が嫌いなわけでもない。「さう擧り好みをする程女房に重きを置くと、何だか元禄時代の色男の様で可笑しいな」という兄の考えに代助も同感なのである。しかし、三度目に佐川の娘と歌舞伎座で見合いをさせられ、続いて本家で食事をともにさせられたあと、「大した異存もなからう」と父から迫られた時の代助は、すでに従来のようにこの問題をなげやりな態度でもてあそんでいるような状態ではなかつた。平岡の妻、三千代の存在が彼の胸を大きく占めていたからである。

三千代は代助の学生時代の友人、菅沼の妹である。代助と三千代はおたがいにほのかな愛情を感じていた。しかし、やがて平岡が三千代との結婚の意志を代助に打ち明けたとき、代助は一種の義侠心から二人を結びつけるために奔走した。父の「道義本位」の教育の影響をまだ多分にうけていた当時の代助は、「互に力に為り合ふ様なことを云ふのが、互に娯楽の尤もなるものであつた」というような気分が平岡と交わっていたのである。もちろん、これはそれから

四五年たったのちの現在の代助による過去の解釈である。「三千代への愛を虚偽をあえてして振り捨てたというより、断念できる程度にしか自覚されていないものだった」<sup>①</sup>ともいわばいえる。が、いずれにせよ、代助が自分の「自然」を裏切ったことは確かであって、そのことは、新婚の夫婦が西下するのを新橋で見送った代助が、「家へ帰つて、一日部屋へ這入つたなり考へ込んでゐた」ことや、平岡からの音信に対して返事を書くとき、いつも代助は一種の不安におそわれた、というところに周到に示されている。それから三年間、代助と平岡との間はいつとはなしに疎遠になっていたが、突然、平岡から上京の通知がきたとき、代助は「はつと思つた」。そして書棚にある重い写真帖をとりあげて、はたち頃の三千代の写真を見出すと、「代助は眼を俯せて凝と女の顔を見詰めてゐた」のである。この三年間に、実は代助は平岡とはすつかり異なった道を歩んでいたのであり、かつての「道義本位」の考え方を一枚一枚皮を剥がすようにとり去って、一種のニル・アドミラリの境地に達していたことはすでにみたとおりである。しかし、代助の三千代に対する愛情は変らずに、意識下に持続されていたことはこれらの描写によつてうかがえる。

しかし、これだけのことであれば、すでに人の妻となった女を取って奪う程の熱情に駆り立てられることはまずないであろう。とく

に代助は変らざる愛を口にするのは偽善者だと考えるような人間になつてゐるのだからなおさらである。それがなぜ三千代への愛を告白するに至るのか。作者としても、ここは余程うまく描かないと説得力不足になる危険を感じたことであろう。作者はここで二つの要素を準備している。ひとつは、三千代のおちいっている心細い、憐れな境遇である。子どもを流産して心臓をいためている。したがつて夫婦の肉体的関係がうまくいかない。それが平岡の放蕩の原因になる。それがさらに平岡の借金につながる。この借金のために三千代自身が金策に奔走しなくてはならない。おまけに、頼りにすべきたった一人の父は北海道で失敗して、三千代に憐れな手紙をよこしてくる。そんな三千代に平岡はとげとげしく当るだけで、情愛らしい情愛を示さない——。三千代はまさに同情されるに十分なように描かれている。そこへ代助が登場する。代助の同情はかつての愛情を目覚ませてゆく。この経過は作者によつて周到に描かれており、けつして不自然を感じさせない。しかし、その前提となる三千代の境遇はあまりにも好都合につくられすぎた感がないでもない<sup>②</sup>。むしろ漱石の独創はもうひとつの要素を示したところにあると私には思われる。それは前節で述べた代助の世界の自壊作用をおこしつつある状態とこの三千代への愛の自覚を結びつけた点である。

ここで、代助の世界を自壊させる要因について、さらに考えてみ

なくてはならない。前節の終わりの部分で、代助がついに「不安」に襲われるようになったこと、そしてこの「不安」をどうとらえていいのか、代助のあの論理的に明晰な頭脳をもってしても、ついに解きあぐねていたことを指摘した。この「不安」の原因はおそらく代助があまりにも軽視した根源的な生命力が充溢を求めるところからくるものと思われる。漱石は周到にも生への欲求を二重の構造でとらえている。ひとつは、代助自身が自覚しているようなしかたでの生への欲求。つまり、すでに心臓の鼓動を検する場面で指摘したように、せんさいな、時には病的な神経の代償によって獲得される性質のものである。ところが、漱石は、代助がこのような形で生への欲求を充たそうとすることにいかに必然性があるうとも、やはりそれは本当の生への欲求を充たすものではないことを知っている。人間の生命力というものは根源的に外的世界への働きかけの中でしか充たされないということを知っている。しかし、作品の上では、これは代助の意識下に動くものとして描かれている。この意識下にある生命力の衝動がついに彼の意識的に明瞭な世界を不安におとしいれるのだが、漱石はすでにこの作品の始めの方から、周到にも、この生への欲求の二重の構造と三千代の問題とのかかわりを、きわめて巧みな構成のもとに描き出している。

たとえば第四章をみてみよう。

## 『それから』論

この章の最初の部分で描かれる「七刑人」の残酷な場面や代助の父と伯父及び祖父にまつわる旧幕時代の血腥い伝説に示される暗い血のイメージとそれに対する代助の反応のしかたは、代助自身の自覚する生への欲求のあり方をよくあらわしている。ところで、そこに描かれる陽気な春の風に吹かれてゆれるアマランスの赤い花びらにじっと眼をそそぎながら、何気なく、その「長い雄蕊の頂きから、花粉を取つて、雌蕊の先へ持つて来て、丹念に塗り付け」る代助の姿には、代助の内部に動く根源的な生への欲求が、彼自身意識しないところで溢れ出ようとしている有様が象徴的に示されている。そして、これが次に描かれる平岡夫婦の未来を代助が懸念する部分、三千代を訪ねたいと思いつながら何となく訪ね難く、おちつかない気分のままに外へ出て酒を飲んだという部分と響き合うとき、代助の意識下に胎動する生が何に向って溢れ出ようとしているかが暗示される。したがって、平岡の来訪を待ち設けていた代助の耳に、取次に出た門野が、意外にも、「先生、奥さんです」とささやく様に告げた時、読者の胸に不安な期待感が萌すのである。代助が三千代の不幸な境遇の一端を知るのはこの来訪の時なのであるが、その不幸な境遇に対する同情が次第に過去の愛情を目覚ませてゆくという経過をとる以前に、こういう形で、代助の深部に動く根源的な生命への欲求と三千代の存在との関連がアマランスの花を媒介に

示されていることが大切なのである。なぜなら、やがて、代助が自分の深部にひそむ根源的な生命力の存在に気がつき、これまでの自分の生活自身がひとつのイリュージョンであったことに気づいて、自らこれを打破する決意をするに至るのは、具体的には、全く三千代への愛情の自覚という形でなされるのであるから。そして、この第二の「幻像打破」を描き得たところに、この作品のすぐれた思想性もあるのだから。

もちろん、この第四章から、代助がそのような思い切った決心をするまでには相当距離があるのであり、作者はゆっくりと丹念に、さまざまな要因に目をくぼりながら筆をすすめてゆく。代助がはつきり「不安」を自覚し、同時に、代助と三千代との間に漂う切ない感情が描き出されるのは、この小説のちょうどまん中にあたる第十章においてである。この章は代助が二度目の父の呼び出しをうけて、佐川の娘との結婚を迫られた部分に続くところである。第四章と同じように、鈴蘭や白百合といった花が二人のかくれた意識や感情をあらわす媒介となっている。とくに、三千代が鈴蘭のつけてある鉢の水を飲む場面は、たんに暑い戸外を心臓の悪い彼女が息を喘ませて歩いてきた苦しさを癒すためという以上の切迫した感情を感じさせる。さらに、二人にとって共通の思い出のある百合の「甘い強い香り」。二人の世界を外界から隔てるかのような雨。この章

ではまだ二人の間に何事もおこらないのだけれども、「非常な神経質であるにも拘はらず、不安の念に襲はれる事は少なかった」代助がどういふものか「不安」に襲われるようになったという部分に続いて、この三千代の訪問をもってきた構成のしかたと、その巧みな象徴的手法による二人の感情表出の表現のしかたが、第四章で分析したことをさらに一段と濃密の度を加えて示しているのである。そして、次の第十一章で、代助のアンニエを描いた作者は、このアンニエからの脱出と三千代の存在とをようやく結びつけるのである。「所謂無目的な行為を目的として活動してゐた」はずの代助はここで「自分ながら、自分の活力に充実してゐない事に気がつく」。そして、「これほど寝入つた自分の意識を強烈にするには、もう少し周囲の物を何うかしなければならぬ」と自覚する。自分が自分にかかわるようなしかたでしか自己の生の確証を求めようとしなかった代助が、ついに外界への働きかけなしには袋小路から脱出できないことを自覚し始めてきたのである。しかし、代助の従来の考え方と生活態度からして、それがただちに政治に結びついたり、労働に結びついたりすることは考えられない。恋愛こそふさわしい。

「最後に、自分を此薄弱な生活から救ひ得る方法は、たゞ一つあると考へた。／＼矢つ張り、三千代さんに逢はなくちや不可

以上の経過からわかるように、代助はそれまでの彼自身の存在のしかたから彼自身を救出するために、三千代の存在を必要としたのである。彼の三千代への愛の告白が、「僕の存在には貴方が必要だ」という言葉であったのは偶然ではない。だが、これでは代助の恋愛はあまりにも思想的にすぎる。思想だけで人を愛せるのだろうか。その上、先に指摘したように、代助の身に迫っているもうひとつの女性問題、佐川の娘との縁談は彼の物質的生活を維持する条件と密接に結びついている。それをも無視し得るほど、代助は灼熱しているのだろうか。

三度目に父から呼び出されて、佐川の娘と昼食をともにさせられたあと、「大した異存もなかつた」と父から迫られたとき、すでに三千代への愛を自覚していた彼はどうしても確答できなかったのであるが、しかし同時に、

この縁談を断ることによって財源が杜絶するのを恐ろしく思うのでもあった。

「もし馬鈴薯ポテトが金剛石ダイヤモンドより大切になつたら、人間はもう駄目である、代助は平生から考へてゐた。向後父の怒に触れて、万一金銭上の関係が絶えたとすれば、彼は厭でも金剛石を放り出して、馬鈴薯に噛り付かなければならない。さうして其償には自然の愛が残る丈である。其愛の対象は他人の細君であつた」

## 『それから』論

代助はこの点でまだ迷っているのである。このように迷っている彼が三千代に愛を告白するまでには、やはりそれ相場の事情がなくてはならない。この点についても漱石はやはり周到である。彼は代助のおちいるアンニューイが次第にいつものアンニューイとちがって、「何か為なくてはゐられない頭の状態」へと変化してくる有様を描き出す。そして、同時に、三千代の不幸な境遇に対する同情が確実に自覚された愛に変ってくる有様を描き出す。平岡の三千代に対する冷淡な態度、また彼の下劣な気持が代助をいっそう三千代に近づける。要するに、先に指摘したあの二つの要素に注意深く目を向けながら、漱石は代助の気持が次第に熱してくる過程を丹念に描き出す。この過程は同時に代助による過去の意味の重さの発見の過程でもある。

「代助は二人の過去を順次に遡ぼつて見ていづれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見出さない事はなかつた。必竟は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでゐたのも同じ事だと考へ詰めた時、彼は堪えがたき重いものを、胸の中に投げ込まれた。彼は其重量の為に、足がふらついた」

代助の過去も現在も、いずれも一種の「幻像」に欺かれた生活であつたが、その中で三千代への愛のみが「自然」なるものとして、蒸溜され純化されて彼の意識に映つた。しかし、「自然」に従つて

とは社会的には罪であった。彼はいつそ佐川の娘との結婚を承諾することによって、「意志」の力で、三千代と永遠に別れようかとも思った。「自然の児にならうか、又意志の人にならうかと代助は迷った」。だが、あげくのはてに彼はこう思うに至った。

「結婚は道德の形式に於て、自分と三千代を遮断するが、道德の内容に於て、何等の影響を二人の上に及ぼしさうもない……心を束縛する事の出来ない形式は、いくら重ねても苦痛を増す許である」

こうして、「今日から愈積極的生活に入るのだ」と決心する。彼は本宅に行つて嫂に会い、佐川の娘との縁談を断り、「姉さん、私は好いた女があるんです」と告げる。彼はこの告白でもって、「自己の運命の半分を破壊したものと認めたかつた」のである。こうして彼はよいよ三千代に愛を告白することになる。二人の共通の思い出につながる白百合の花の香りの中に「自然の昔」を再現しつつ、二人が「愛の刑と愛の實とを同時に享けて、同時に双方を切実に味は」うこの場面は確かに美しい。まさに、知性の人代助にふさわしい愛の燃焼のさせ方である。<sup>⑤</sup>

しかし、今後來たるべき事態に対して彼はどう立ち向うつもりなのだろうか。

「彼は自ら切り開いた此運命の断片を頭に乘せて、父と決戦す

べき準備を整へた。父の後には兄がゐた、嫂がゐた。是等と戦つた後には平岡がゐた。是等を切り抜けても大きな社会があつた。個人の自由と情実を毫も斟酌して呉れない器械の様な社会があつた。代助には此社会が今全然暗黒に見えた。代助は凡てと戦ふ覚悟をした」

代助の主観においては確かにこのとおりであつたであろう。しかし、それがほかならぬ彼の主観においてしかさうでないことを漱石は洞察しているようである。代助のあの告白に至るまでの過程をあれほど丹念に必然的ななりゆきとして描いていながら、それがあくまでも、あのような生活態度とあのような考え方をもって生きてきた男にとつての必然性にすぎないことを漱石は見抜いているようである。

「事実として、社会は制裁の権を有してゐた。けれども動機行為の権は全く自己の天分から湧いて出るより外に道はないと信じた。かれは此点に於て、社会と自分との間には全く交渉のないものと認めて進行する氣であつた」

ここはいかにも自我本位に生きてきた代助にふさわしい。しかし、これに続く部分、

「代助は彼の小さな世界の中心に立つて、彼の世界を斯様に観て、一順其關係比例を頭の中で調べた上『善からう』と云つて、

又家を出た」(圈点筆者)

とあるところが、「彼の小さな世界の中心に立つて」とは何と辛辣な言葉であろうか。しかも同様の表現は敷衍において、「自分の世界の中心に立つて」という形で、もう一度出てくるのである。確かに、告白後の代助の落ち着きも、勇氣も、実はその「小さな世界の中心」に立っている限りのことであつた。この小さな世界の外にひろがる生きた現実社会が裸形のままで彼にかかわってくるにはまだ少し間があつた。漱石は注意深く、「代助には此社会が今全然暗黒に見えた」と書きそえている。せいぜい、「世界の恰好が少し變つて来たと云ふ自覚」以上には出なかつた。しかし、佐川の娘との縁談を断るために父と最後の面会をしに本宅へ行った時からこの裸形の現実社会は徐々に彼に迫ってくる。

この最後の会見で、父は始めて代助に佐川との縁談をすすめる真意を語つた。それはすでに指摘したように、一種の政略結婚である。

「さう云ふ親類が一軒位あるのは、大変便利で、且つ此際甚だ必要ぢやないか」

これが父の言い分であつた。代助はこの父の露骨な言い分に対して、「今更驚ろく程、始めから父を買ひ被つてはゐなかつた」。むしろ、父が仮面を脱いだのを快く感じた。そして、「彼自身も、斯ん

『それから』論

な意味の結婚を敢てし得る程度の人間だと自ら見積つてゐた」。

けれども、すでに三千代にあの告白をした代助は以前の代助とは變つていた。代助は謝絶した。苦り切つた父は、「ぢや何でも御前の勝手にするさ」「己の方でも、もう御前の世話はせんから」と、いわば最後の宣告を下した。ここで始めて、代助はどうして食つてゆくかという問題に直面するのである。当然のことながら、彼の頭にはまず閃くのは「職業」の二字である。しかし、これまで彼自身の「小さな世界の中心」にしかいながつた彼には、「職業」と云ふ文字がある丈で、職業其物は体を具へて現はれて来なかつた」。あづくのは、「彼は明らかに自分の影を、犬と人の境を迷ふ乞食の群の中に見出した」。この落魄の中に三千代を引張り廻さなければならぬ有様を想像したとき、彼は改めて「相当の地位を有つてゐる人の不実と、零落の極に達した人の親切とは、結果に於て大した差違はない」と思うのだった。「職業」といい、「落魄」といい、すべてそれを観念の上のこととしてしか表象しようのない代助らしい動揺である。そして、愚かにもこの動揺した氣持を三千代に訴えてしまふ。「今貴方の御父様の御話を伺つて見ると、斯うなるのは始めから解つてるぢやありませんか。貴方だつて、其位な事は疾うから氣が付いて入らつしやる筈だと思ひますわ」と三千代はたしなめる。そして、三千代はもしもの場合には死ぬ覚悟でいることを代助に告

五七



げる。

この場面は、代助は確かに彼なりに誠実なだけけれども、これまで自分の「小さな世界」の中でしたかものを考えてこなかった人物にふさわしい誠実であること。したがって、すでにさまざまの世の辛酸をなめてきて、むしろその中で自己の魂の純粹さを鍛えてきた三千代から見れば、何ともいえないもうい誠実さとして、それが映らざるをえなかった事情がよくあらわされている。三千代が顔色を変えたのも当然であった。が、しかし、だからといって、漱石はことさらに代助をルージン風の人物として描こうとするのではない。そういう弱さは弱さとして、それがこれまでの代助の生き方から生ずる必然の欠陥として描きつつ、同時に、そういう弱い人間なりに、彼が誠実に思いつめたとき、やはりその誠実をどんなふうに貫いてゆくかを注意深く描いてゆく。要するに、こういう人間の感受性と思考と行動を具体的にとらえようとしているのだ。代助は自分の惑乱に気がつく。「少し脳が何うかしてゐるんだ」とひとりごつ。彼は自分の卑怯を恥ずるが如く、はっきりと自分で平岡と会って解決をつける決心であることを三千代に告げる。彼は平岡と対決する。その告白のしかた、謝罪のしかたは彼らしくやはり論理的である。彼を再び惑乱させるのは心労のために三千代の心臓が悪化して倒れたということだ。これはあり得ることではあるが、漱石らしくない

不必要の虚構のように思われる。むしろ興味をひくのは最後の兄との対決の場面である。兄誠吾は父と同じく実業に従事している人物であるが、父のように妙な「道義」をふりまわしたりしない。万事ゆったりとしており、代助が道楽をして金を使っても適当に尻拭いしてやるような人物である。毒にも薬にもならないような話題に豊富であり、その話術でかえって人をくつろがせる。代助は父よりも余程兄の方に好感をもっている。しかし、この兄はけっして鈍感な男でもなければ、仕事の上の利害にうとい人間でもない。そのことはすでに代助が三千代のために金策をしてやろうとしたとき、また平岡の就職の世話を兄に依頼したときの兄の反応のしかたに示されている。「我々も日糖の重役と同じ様に、何時拘引されるか分らない身体なんだから」と洩らすように、実は激しい緊張した生活に身をさらしている。父とはちがった形ではあるが、いかにも二代目らしいしかたでの階級的本能をちゃんと身につけている。平岡の手紙でこの次第を知った兄が代助を訪れたとき、彼のこの本能ははっきり姿をあらわす。

「世の中に分らない人間程危険なものはない。何を為るんだか、何を考へてゐるんだか安心が出来ない。御前は夫が自分の勝手だから可からうが、御父さんやおれの、社会上の地位を思つて見ろ。御前だつて家族の名誉と云ふ観念は有つてゐるだらう」

そして、「貫様は馬鹿だ」「愚図だ」と代助はののしられ、父とも兄からもはっきり義絶を宣告される。代助は平岡よりも、おそらくこの兄の最後の態度によって、自分がいよいよ生まのままの現実社会に直面したことを痛烈に感じさせられた事であろう。兄が帰ったあと、代助はいきなり職業を求めて真夏の街頭にとび出してゆく。それから先、代助がどうなるか、もちろんわからない。しかし、ここではっきりしていることは、最初、代助の知的分析によって明確に批判され、代助の「小さな世界」の外に遮断されていた現実社会が今や確実に代助を呑み込んだということである。代助の現実批判が確かにそれなりの真実を含んでいたことを知る読者は、彼もまた現実社会の法則の中で生きることを余儀なくされた今、代助がああ批判精神を抱きつつ、ここでどう生きるだろうかと問うであらう。問題は実はここから始まる。したがって、『それから』一篇のエピソードはただちに新たな問いへのプロローグであるといえる。しかもそれは漱石自身だけでなく、あらゆる市民的作家の容易に解き得なかつた問いへのプロローグではなかつたらうか。

註①越智治雄『漱石私論』一六四頁

②亀井勝一郎は「『全く彼自身に特有な思索と観察の力によって、次第次第に鍍金を自分で剝がして来た』その過程をこそよく描いてほしかったのである」といっている。(亀井前掲

『それから』論

論文)たしかに、当時の知識人の状況を考えるとき、これは興味深いテーマとなりうる。しかし、それはもうひとつ別の作品を要求することになるのではないだろうか。この作品についてみると、漱石の説明をそのまま受け取って読み進んでいっても、全体のバランスからみて、けつして破綻を感じさせたりはしない。

③この点については、すでに武者小路も指摘しているところである。(『それから』に就て・「白樺」創刊号)

④越智治雄氏も、「あの過去の数年間は自然の語によって著しく理念化される」と指摘される。しかし、氏のようにこの「自然」の非現実性を強調するとき、これが二重の意味での「幻像打破」につながってゆく大切な意味を見落とすことにはなりはしないだろうか。

⑤代助の三千代に対する恋愛にかんする漱石の表現のしかたについては疑問を表明する批評家が少なくない。

。「代助の心は躍つてゐない。血は湧いてゐない。……どこまで行つても理詰めな感じがする」(正宗白鳥『作家論』)  
。「代助はただ反省によつてしか恋さない。しかも恋愛によつて反省を強いられるより、むしろ反省によつて恋愛を見出すのである」(『中村光夫作家論集』2所収、「夏目漱石」)

。「それから」に出てくる恋は、恋といふよりもむしろ恋の優しい想ひ出であつた。知性の憧憬にすぎなかつた。その憧憬はしかし、世にまたとないほど純粹なものであつたが」

(亀井勝一郎前掲論文)

等々。しかし、漱石はあとでも述べるように、代助のような生活と思想をもつものにふさわしく、その進化と退化の両面に目を注ぎながら、その恋愛のしかたを造形している点に注意すべきだ。少なくとも、中村光夫氏のように、大津順吉の恋愛とくらべるのは見当ちがいでなからうか。

### 三

以上、この作品のテーマがどのような内容的ひろがりの中で追求され、それがどのような構成のしかた、筋の立て方、細部における表現のしかたと結びついているかをみてきた。漱石はここで新時代の知識階級の精神的な問題性を静観的な自我の成立とその自壊においてみているかのである。かつての明治十年代における自我と民権と民族の統一が信じられた時期のことはいわれないにしても、透谷や二葉亭の場合でも、敗北することはわかっている、現実に対して激しくはたらきかけねばやまない自我のあり方がそこにはあつた。この明治二十年代の青春群像を描いた藤村の『春』が暗い霧

気を漂わせているにもかかわらず、どこかに、厚い雪の下から萌え出ようとする春の若芽のような生命の息吹きを感じさせるのも、「内部生命」に対する確信が彼等青年の中にまだあつたからである。ということは、彼等の「内部生命」に対応する現実がいかに暗くおぞましきものではあつても、それがまだ問題化することはなかつたからである。しかし、日清戦争後、時代は徐々に変わってくる。

『春』の終わりに近い部分にこんなところがある。兄が未決監に入られ、生活に窮迫した岸本が陶器の画工になろうと決心するところである。何故彼はこれをえらんだか。

「其頃西洋から来たある美術雑誌の中に、『芸術は吾心を得たり』といふ題の画があつた。男が片肌ぬぎで、大きな花瓶に余念もなく草花の模様を画いて居ると、女は戸口のところに立つて、其花瓶の画に見惚れて居る。岸本は斯の画中の人物から思いついた。同じ一生を埋めるにしても、『芸術は吾心を得たり』とでも誰か言つて呉れるものが有れば、まだ／＼埋め甲斐が有るかのやうに思つたのである」<sup>①</sup>

しかし、これが幻想にすぎなかつたことを岸本は痛い程思い知らされる。仕事というのは輪廓どおりにドロドロした薬をぬりつけてゆくだけ。「人の気を腐らせるやうな職工仲間の空気」。そこには絵画の商品化があり、商品化された仕事を続ける中で精神まで商品化

された人間群像があつたのである。岸本は「『大馬鹿!』と彼は自分で自分を嘲つて、泣き出しさうな顔付」をしながら帰つてゆく。

だが、岸本が驚き、恥辱を感じたこの現実には、日露戦争後の資本主義の発展の中でますます一般化し、日常化されてゆく。明治四十年代の青年はもはやそれに驚くことはなくなる。彼等は知的であればあるほど、冷やかな笑を口辺に漂わせて、この現実を諦視する。

彼等の自我は現実にかかわろうとする衝迫力を失い、冷たくこの現実を静観するようになる。彼等は鋭敏な感受性に富んだ神経の束のように無方向にゆれ動き、自分の内界にだけ耳を傾けるようになる。小栗風葉の『青春』に登場する関欽哉などその先駆的な形象であらう。白鳥の『何処へ』の菅沼健次、荷風の『冷笑』に登場する諸人物等、どこかでおたがいの血縁関係を感じさせる人物である。

長井代助もまた、確かにこれらの人物と血脈を通じている。しかし、漱石が代助を造形してゆくそのしかたは他の作家とは余程異なっている。漱石は代助に示される静観的な自我の生理と病理を克明に描き出すと同時に、このような自我のあり方がどのような社会的現実から生まれ、主観的には社会から一步退いて孤独の生活に甘んじていながら、実は社会的現実とどうかかわっているか、またかかわらざるをえないかを同時に描き出している。そこに精神的な問題性が同時に社会的な問題性とただちに相かかわる形で表現される所

いがある。『冷笑』に登場する小山清も代助ときわめてよく似通つた人物である。一介の貧乏な武士から小山銀行をつくりあげた父をもちながら、清は一向に仕事に情熱を感ずることができず、「世の中を愚なものだ、誠に退屈なものだ」と感じている点<sup>⑤</sup>、代助とそっくりである。清がどうしてこうなつたかについても荷風は周到な説明を加えている。基礎のすでに出来上つた銀行頭取として、もはや自分の創意をはたらかせる余地がなく、器械的生活を余儀なくされていること。しかもこの無意味な生活に、やれ「社会の進歩とか人類の幸福とか云ふ立派な皮を冠」せようとする欺瞞。儒教道徳を標榜しながら、言行不一致に気づかぬ父に対する反撥。政府、政党議員、官吏らと商人の結託等々。これらを見ると、<sup>⑥</sup>「國家及び社会の事件に対して真面目なる興味を感ずる事は甚しき理性の欠乏を証明する事であつて、若し語をかへて云ふならば、世間一般の活動に伍せんとせば先づ凡ての矛盾と不条理と滑稽とに対して全く無神経たらねばならぬ事になる」<sup>④</sup>。こうして、清は八笑人の生活を憧れるようになる。このところも、代助がどうしてニル・アドミラリの境地になつていったか、その経過とそっくりである。そこには、同じ社会的現実、同じ精神的雰囲気に対する共通の反撥があるのだ。このように、荷風もあの八笑人の集いがどのような現実の中から生まれたかを、きわめて批判的な筆致で描き出しているのだが、『そ

れから』とおそらく決定的に異なる所は、この八笑人的集いそのものがもう一度社会的な観点から批判的にとらえなおされていないということである。もちろん、荷風は八笑人的集いが時代に対する批判的意味をもっているからといって、それで自己満足する程おめでたくはない。こうした生活に対しても冷たく醒めたシニカルな視線を向けることを忘れていない。けれども、そのシニカルな視線がこの作品の登場人物たちによって批判的に眺められた明治の現実をつきぬけて、その奥底に横たわるもうひとつ深い現実のあり方にまで及んでいるわけではない。したがって、作品形式の上からいっても、次々と奇人が登場して、それぞれの生活と意見が述べられるという場面の連続になるのであり、この八笑人的理想の運命そのものが描かれるわけではない。これに対して、漱石は代助のシニカルな現実批判の上に立った美的生活そのものの運命を描き得た。そこには、代助的自我に内在する一種の腐蝕作用に対する精神病理的な考察とともに、漱石の重層的な現実把握があるのであり、これが代助の像を彫塑的に描きあげることと可能にしたのである。

漱石の重層的な現実のとらえ方はすでに『三四郎』においてみられる。三四郎の意識に映じた現実と、意識の外にとり残された現実というところとをえ方。だが三四郎が意識の外にとり残した基底的な現実社会の姿は、代助の明晰な頭脳によって余すところなく批判的にと

らえられているかのようなのである。現実が父や平岡によって代表される限り、代助の現実把握は正当である。しかし、その代助を「けれども、少し胡麻化して入らつしやる様よ」という三千代の視点を漱石は忘れていない。この視点とは、いわば野心のない生活者の目ともいべきものである。『彼岸過迄』に出てくる「良民」の目である<sup>⑤</sup>。彼等は代助によって批判され、その故に自らそれにかかわることをいさぎよしとしない疎外された労働を強いられて生きている。しかし、平岡とちがう点は野心がないということである。そのため、視野は狭くても、比較的曇りのない目をもつことができる。代助はこういう人々の存在が自分にとってどういう意味をもつか、かつて思っていたらぬ。かかる生活場裏において生きる人々に対しては、「同情の念より美醜の念が先に立つのが、代助の常であった」。したがって、「少し胡麻化して入らつしやる様よ」という三千代のことばは代助に何らの痛痒をも感じさせなかった。それだけでなく、生活費に苦しむ三千代に、旅行費にすべきはずであった紙幣の幾枚かを手渡して、「美しくい夢」を見たような気分になることもできたのである。しかし、漱石はこのとき、三千代が「長い睫毛を三度打ち合はした」のを描くことを忘れていない。私たちはここで『小僧の神様』に出てくる、貴族院議員Aと代助を比較しないであろうか。しかし例の告白後、実は「小さな世界の中心」で観

念的にしかものを考えてこなかった代助は三千代にくらべて奇妙に卑小に見えてくる。もちろん、二葉亭が『其面影』でころもみたように、代助を無理にルーズン風の人物に描くようなことを漱石はしていない。それなりに誠実な愛を貫こうとする人物に描かれている。このことはすでにみたところである。そうだからこそ、小野哲也のように、妙に社会の外にはみ出してしまつて、真の問題の所在があいまいになってしまうのではなく、最後に代助を具体的に社会にかかわらせることによって、正しい問題を提起することができたのである。私は今、「良民」の目の存在を三千代に代表させて述べ

てきたのであるが（そして、三千代がその典型であることはたしかであるが）、漱石はほかに、門野や婆さんを描いている。彼等は三千代のような代助の生活に対する本質的な批判者の役割を果たしていないが、代助の「小さな世界」の中での苦惱を相対化する役割をしはしば果たしている。梅子も境遇こそちがえ、家庭にある女性らしく、それなりに野心のない生活者の目でもって代助を照らし出す役割を果たしている。こうして、代助があらゆる道徳の出発点と考えた「社会的事実」が静観的個人の意識に映じた、物象化した社会の姿以外の何物でもなく、現実の社会は必ずしも代助が批判したようにばかり動いているのではないということが、こういう人々の形象によって示される。そうだからこそ、野心のない点では三千代

と同じであつても、批判的意識という点でははるかに際立っている代助が、これから一生活者としてこの現実社会の中で生きるとき、どういふことになるのだからかという、近代における個人と社会の問題にとつて、きわめて本質的な問いを正確に提出することができたのである。

もっとも、物象化した社会を切り破るもうひとつの現実の視点を野心のない生活者の目、「良民」の目以上には求められなかった限りにおいて、「我々自身にとつての『明日』（啄木）の展望が漱石の前に容易に開けてくるものとは思われない。がしかし、『何処へ』の最後の場面が菅沼健次自身の虚無的な気分表現以外の何もでもなく、この虚無的な気分を相対化する視点が形象化されていないのに対して、『それから』の結末は重層的な現実把握にもとづき、正しい社会的遠近法のもとに、問題が提出されているのを感じるのである。ここに、近代文学における造形のしかたを分つ、本質的な分岐点があるのではなからうか。（71・10・30）

註① 『春』百十七

② 『春』百十九

③ 『冷笑』一

④ 『冷笑』八

⑤ 拙稿『彼岸過迄』について』の第三節を参照いただければ幸い。（『日本文学』71・5）